

互いに認め高め合う学級集団の育成 ～ 構成的グループエンカウンターを活用して～

那覇市立垣花小学校教諭 宮里 直子

テーマ設定の理由

今日、核家族化、少子化が進み、子ども達を取り巻く環境も大きく変化してきている。子ども達の社会体験の不足は、集団の中で人間関係をうまく結べない子どもを生み、いじめ・不登校・学級崩壊などの様々な問題を引き起こすこととなった。そうした中で、子どもが一日の大半を過ごす学校・学級は、社会性を身につけ、人間関係のあり方を学ぶ集団の場として一番身近であり、その果たす役割は、ますます重要になってきている。

このような社会状況の下、「生きる力」の育成を目指すことをねらいとして小学校学習指導要領が改訂された。特別活動においても、「児童の自発的、自主的な活動」がいつそう活発に行なわれるようにすることが重視されている。しかし、「望ましい集団活動」が行われるためには、「望ましい人間関係」が学級内に築かれていることが必要である。つまり、教師と児童、児童相互に信頼・協力などの温かい人間関係がなければ望ましい集団活動は成り立たないものとする。「望ましい人間関係の育成」に関しては、学級活動の内容「(2) 日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること」に示されており、学級の実態や一人一人の児童をよく見つめ好ましい人間関係の醸成に努めることが教師にも求められている。

これまでの教育実践を振り返ってみると、子どもとの対応の中でうまくいかないことがあった。工夫して指導するがなかなか十分な成果は得られず、信頼関係の大切さを痛感した。また、普段はうまく友達関係が取れているように見える子ども同士でも、安心して何でも言い合える関係が作られていないことが見えてきた。このことから、学級で子ども達が安心して自分を出せるような人間関係を築いていきたいと考えた。そのような人間関係ができれば、互いに認め合い意見を交わしながら高め合える学級になれると考えた。

そこで今回、学級活動で構成的グループエンカウンターを取り入れ、望ましい人間関係の育成を図ることによって、互いに認め高め合える学級集団を育成することができるであろうと考え、本研究テーマを設定した。

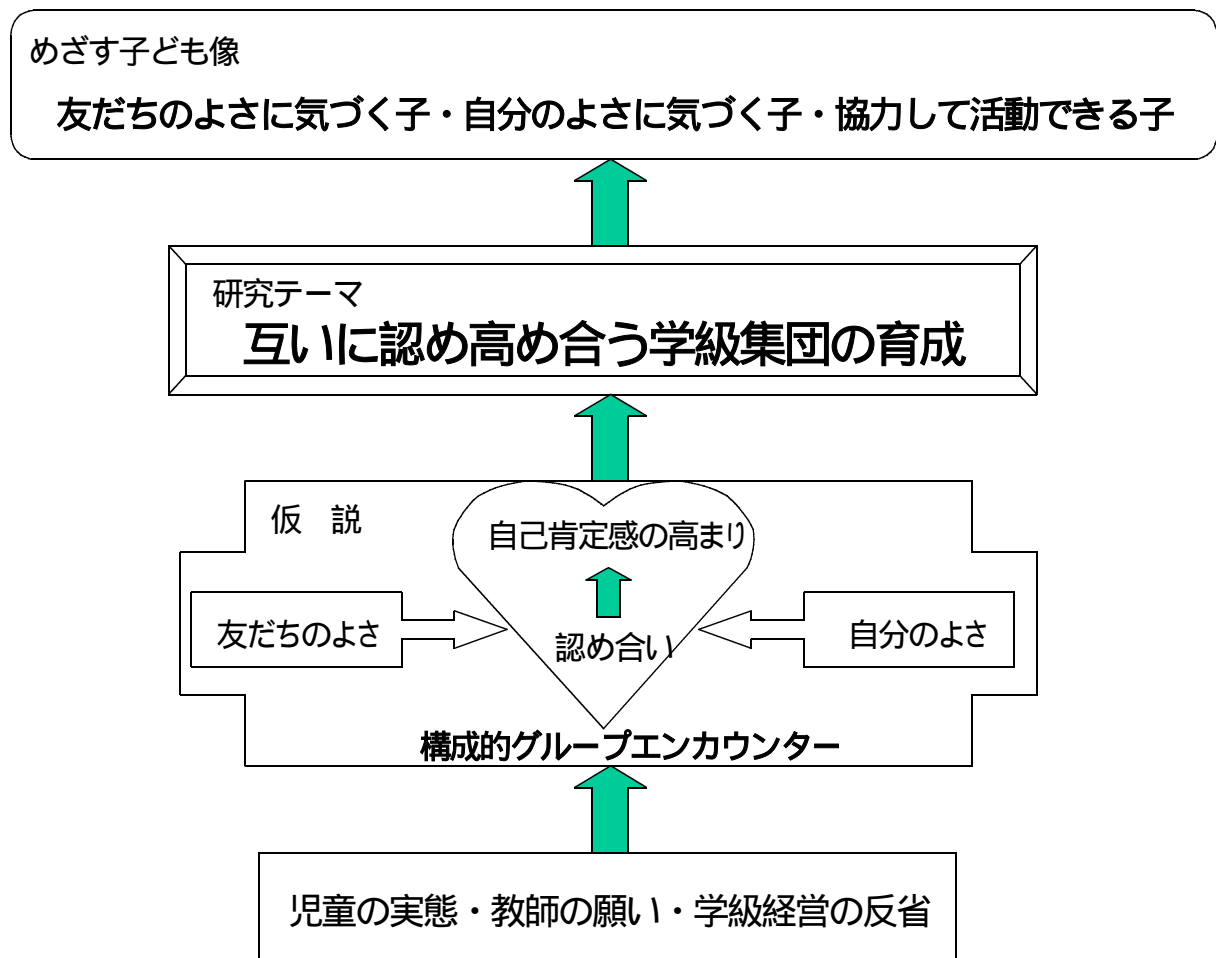
研究目標

互いに認め高め合う学級集団を育成するために、学級活動における構成的グループエンカウンターの活用方法を研究する。

研究仮説

学級の実態を把握し、課題にあった構成的グループエンカウンターを体験させることにより、友だちのよさに目を向け、自分のよさにも気づき、互いに認め高め合う学級集団が育成できるであろう。

研究構想図



研究内容と方法

1 互いに認め高め合う学級集団とは

互いに認め高め合える学級集団とは、困ったときには助け合い、うれしいときには喜びを分かち合い、安心して自分の思いや考えを言える、あるがままの自分を受け入れてもらえる受容的で温かな雰囲気のある学級である。また、学級の成員相互に所属感や連帯感があり、それぞれの目標に向かってがんばろうという意欲に満ちた学級、つまり、児童が互いに切磋琢磨し合える人間関係が築かれている学級である。

そこで、本研究では、学級や学校生活の充実と向上を図り、健全な生活態度の育成に資する活動を行うことを目的とした学級活動において、受容的で切磋琢磨し合える人間関係作りを図りたい。その一方法として人間関係作りにも有効とされる構成的グループエンカウンターを取り入れたい。

2 構成的グループエンカウンターについて

(1) 構成的グループエンカウンターとは

構成的グループエンカウンターとは、エクササイズやシェアリングを通して、児童が互いに本音と本音の交流を行い、考えを深め、行動を変化させるものである。それによって人間関係作りが苦手な子も、集団の中で居場所を見つけ、相手を受け入れ、自己を表現し

ながら温かな人間関係を作っていくことができる技法である。

エクササイズとは、「他者理解」や「自己理解」などのねらいを達成するために行う活動のことであり、ゲームとエクササイズの違いもそこにある。

シェアリングとは、エクササイズをふり返ることによって、そこでの気づきや感情を明確化し、思いや感情をメンバーで分かち合い、体験したことの意味を考えることであり、ねらいを定着化させる働きも持っている。シェアリングを行うときのルールとして、以下のことが挙げられる。

友だちの発言には最後まで口を挟まない。

同感な場合は、うなずいたり拍手したりする。

意見が違って批判したりしない。

シェアリングで発言したことについては、後で追求したりしない。

(2) 構成的グループエンカウンターの指導過程

1 単位時間でエクササイズを実施する場合の指導過程は、下記の通りである。ただし学級や児童の実態に応じて手順を入れ替えたりカットしたりすることも可能である。

指 導 過 程	実 施 上 の 留 意 点
導 入	本時のねらいやエクササイズ名をはっきり告げる。
ウォーミングアップ	雰囲気盛り上げるために行う。中心のエクササイズに時間がかかる場合は省略可。
フィードバック	リーダーが感じたことを短く伝える。
エクササイズの説明	エクササイズのねらい・やり方をわかりやすく伝え、やってはいけないことも伝える。場合によっては、デモンストレーションを行う。 エクササイズに参加しない自由、質問に答えない自由を認めることを伝える。
エクササイズ実施	ねらいからはずれないように、メンバーの不適切な発言や行動があった場合に補足や修正等の介入を行う。
シェアリング	シェアリングのルールを守らせながらエクササイズをして感じたことを話し合わせる。 リーダーはシェアリングで児童が発言したことに対して解釈したり分析したりしない。ネガティブな感情も大事に扱い自己解決できるように導く。
まとめ	リーダーが、エクササイズのねらいの確認とエクササイズを通して学んだことをどう生かしていくかについて話す。

図1 構成的グループエンカウンターの指導過程

3 学級の実態把握

構成的グループエンカウンターを実施するにあたり、学級や児童の実態を把握し、学級としての課題を明らかにする必要がある。本研究では、「Questionnaire - Utilities (Q - U)」(図書文化社)を活用して実態を把握することにした。その理由として、朝の会や帰りの会などの短時間で実施することができる 児童が答えやすい内容である 結果を教師自身で分析できる内容であるということがあげられる。

(1) 調査内容

Q - Uでは、学級集団の状態、学級内の児童一人一人の状態、学級集団と個々の児童のかわり、児童の学級生活の満足感という内面の世界を理解することができる。

Q - Uの内容は、学校生活意欲尺度と学級満足度尺度から構成されている。学校生活意欲尺度は、「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」の3つの領域から構成されている。この3つの総合得点で、学校生活の諸活動に対する意欲が高いか低いかを知ることができる。また、後述するプロフィールによって、3つの領域の具体的な児童の状態を把握することができる。

学級満足度尺度は、図2のように縦軸を承認得点、横軸を被侵害得点とし、学級生活満足群・非承認群・侵害行為認知群・学級生活不満足群の4つの児童群に分けられる。この尺度では、承認得点が高い子ほど学級で認められていると感じていることになる。一方、被侵害得点が高いほど意地悪や悪ふざけを受けていると感じていることになる。それぞれの児童群の分布を分析することによって、学級や個々の児童の状態を把握できる。

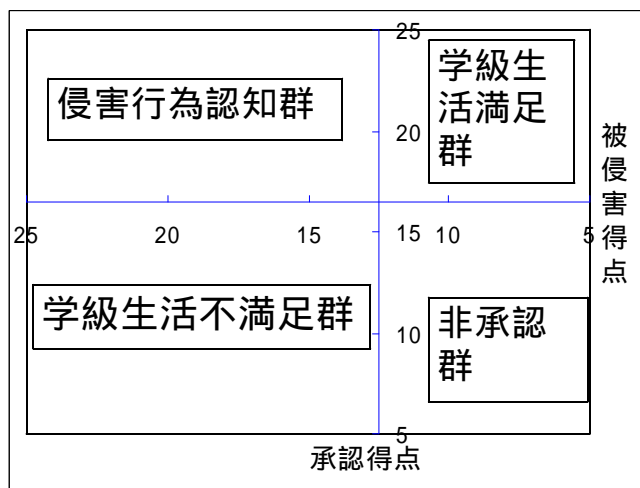


図2 学級満足度尺度

(2) Q - Uの結果の分析と考察

学校生活意欲総合得点(図3)

この尺度の全国平均は 26.5 で、本学級の平均は 28.8 である。

意欲群別にみると本学級は、得点が 29 点以上の高意欲児童群が 14 人(56%)、22 点以上 28 点の中意欲児童群が 11 人(44%)で、21 点以下の低意欲児童群は一人もいない。以上のことから、本学級の児童は、諸活動に対して全体的に積極的だと考えられる。

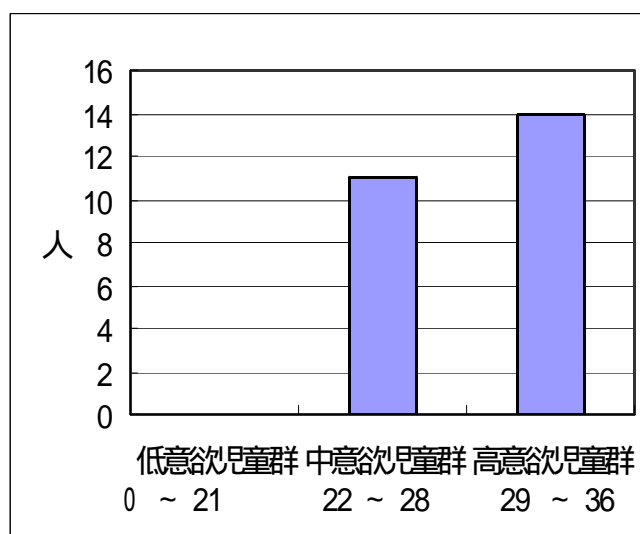


図3 学校生活意欲総合得点

学校生活意欲プロフィール(図4)

本学級は、友達関係・学習意欲・学級の雰囲気それぞれ全国平均を上回っている。しかし、3領域のバランスでは、友達関係でやや低いという結果が出た。特に「クラスの人から好かれ仲間だと思われている」の問いにおいては、否定的に答えた児童が、11人(44%)いた。進級してひと月、まだ友達関係で不安を持つ児童が多いと考えられる。

学級満足度尺度(図5)

本学級は、学級生活満足群の児童と非承認群の児童で占められている学級であることがわかる。

ここで、支援が必要となる非承認群の児童は8人いる。非承認群の児童は学級内で認められることがあまりないと感じている児童である。また、学級生活不満足群に属する児童は6人(24%)いる。学級生活不満足群に属する児童は、承認得点が低い上に被侵害得点が高いので、非承認群と同様に学級の人から認められていないと感じている上に、つらい思いをしたことがあるなど学級に自分の居場所が見つけられない状況であると考えられる。

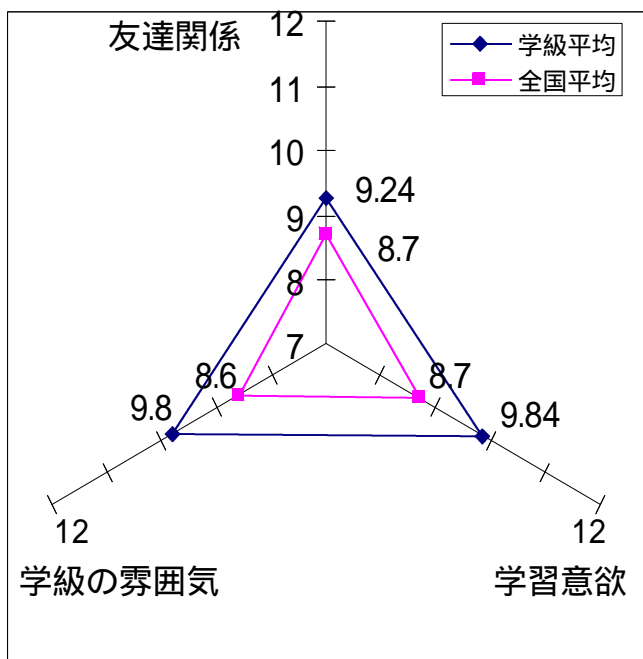


図4 学校生活意欲プロフィール(5月)

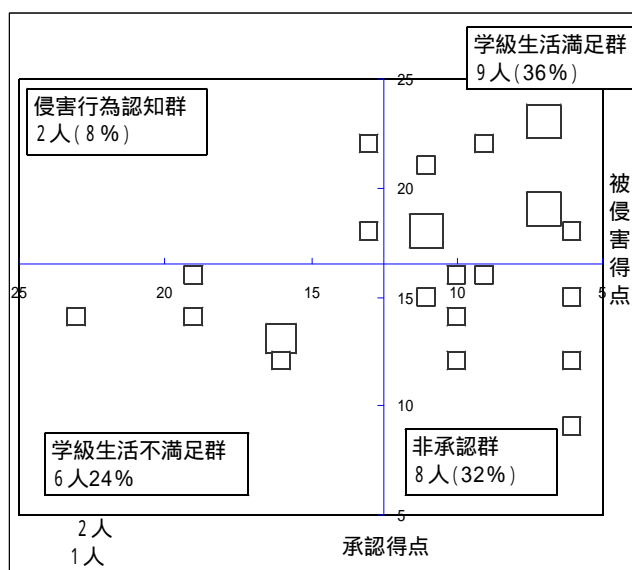


図5 学級満足度尺度(5月)

4 エクササイズ選択

(1) エクササイズ選択の視点

前述の学級の実態から、本学級では、児童一人一人の居場所作りと、自分にはよいところがあり、友達は自分を認めてくれているという気持ちを持たせることが重要であると考えられる。そのために、まず受容的な人間関係を児童間にする活動を行い、次に友だちのよさ、自分のよさを自覚できるような活動を展開する必要がある。それができれば、学級への所属感も高まり、自己肯定感も高まると考えた。以上のことから、本学級で行う構成的グループエンカウターのエクササイズは、人と人との交流を促す・受容的な雰囲気を促す・自己理解や他者理解を促す・自己肯定感を高める等のねらいを持ったものから選択した。

(2) 選択したエクササイズ

エクササイズ	ねらい	活動内容	留意点	資料
カム・オン	グループで協力をしながら楽しく遊ぶことによって、交友関係を広める。	各チームで王様を決め、王様以外の方は他のチームの王様とジャンケンをする。勝った人は、次の人にタッチ、負けたらチームを呼び寄せる。勝つまで繰り返す。	仲良くするためのゲームであることを理解させる。	ふりかえりカード
すごろくトークング	自分の考えや経験を語り合ったり、聞き合ったりすることでお互いを理解する。	さいころを振り、出た目の数だけすごろくを進み、止まったところのテーマについて話す。	話しやすいよう、話形・聞き方を指導する。	すごろく用紙・ふりかえりカード
ミラクルマット	助け合う活動を通して、友達によさに気づいたり、友達に認められる喜びを体験する。	ミラクルマットの上を協力して川向こうの岸に渡る。次に班員の半数にハンディをつけて行う。	速さを競い合うのではなく、優しく助け合うチームがよいことを理解させる。	ふりかえりカード・アイマスク・鉢巻き・マット
ほめあげ大会	認められる体験を通して自分のよさを知る。	グループの自分以外の人に褒めたい点を書いて渡す。	友だちのよさを見つけられるように支援する。	よいところを書く用紙・ふりかえりカード
がんばり賞をおくろう	互いのがんばりを見つけて認め合うことにより、さらに自己肯定感を高める。	グループの人のがんばっていたこと、その理由を賞状に書きグループで表彰する。	相手がもらってうれしい賞を書くように支援する。	がんばりを書く賞状・ふりかえりカード

5 学級活動年間指導計画への位置づけ

温かい人間関係を築き、互いに認め高め合う学級集団の育成を目指して、構成的グループエンカウンターを学級活動の中で活用するには、対人関係への不安を解消したり、集団活動を促進していかなければならない時期などを考慮して位置づけると効果的であると考え。例えば、学級開きや各学期の始めの時期、遠足や運動会など大きな行事の前後等の時期が適当であると考え。また、限られた時数では十分に身につくことはできないと考え、意図的、計画的、発展的に「朝の会」「帰りの会」などにも構成的グループエンカウンターを位置づけ、日頃から学級でふれあう活動が行えるよう計画をした。

4年 学級活動年間指導計画(案)

月	学 級 活 動			朝の会 帰りの会 ショートエクササイズ
	(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること [20時間]	(2) 日常生活や学習への適応および健康や安全に関すること [15時間]		
	題材名	題材名	エクササイズ	
4月	役員選出・係を決めよう 学級のめあてを決めよう	学級開き 四年生になって		先生とビンゴ あいさつゲーム
5月	学級の歌を作ろう	クラスのみなどと仲良くなる	カム・オン	
6月	係の仕事を見直そう 慰霊の日に向けて話し合おう	避難訓練事前指導		
7月	お楽しみ会の計画 お楽しみ会の実施	夏休みの生活と計画		

9月	役員選出・係を決めよう 運動会のめあてを決めよう	夏休みの報告会 協力してがんばろう	すごろくトーキング ミラクルマット	最高にうれしい「おはよう」
10月	リレーのチームを作ろう トラブル解決発表会をしよう	目を大切に みんなのよさを見つけよう	ほめあげ大会	がんばったあなたへ(運動会の反省)
11月	読書発表会をしよう お楽しみ会の計画	避難訓練事前指導		
12月	お楽しみ会の実施	エイズについて 冬休みの生活と計画		
1月	役員選出・係を決めよう 係を決めて活動計画を立てよう	学芸会のめあてを決めよう		マインドタイム
2月	作文集を作ろう 作文集づくり	みんなのがんばったことを見つけよう	がんばり賞をおくろう	
3月	お別れ会の計画 お別れ会の実施	もうすぐ5年生		

授業実践

1 題材名「がんばり賞をおくろう」

2 題材観

「がんばり賞をおくろう」は、これまでのがんばりをグループ内のメンバーに見つけてもらい、そのことを表彰してもらうエクササイズである。自分のがんばりを他のメンバーに認めてもらう経験を通して、自己肯定感の高まりをねらっている。

本学級の特徴として、承認得点の低い子が多いことがあげられる。「みんなから認められるようなものはない。」と自分に対して自信の持てない子が多い。そこで、「がんばり賞をおくろう」を行い、グループの他のメンバーに自分のよい点を見つけてもらい、賞をもらうことによって、今まで気づかなかったよい点を自覚したり、友達は自分のことを認めてくれているという喜びや信頼感を味わわせ自信を持たせたい。そうした経験を通して自己肯定感が高められると考えた。

3 児童観

本学級の子ども達は、明るく学級全体としても和やかな雰囲気であり、交友関係は良好である。しかし、中には自分はみんなから好かれていないと感じていて、クラスに居たくないと感じている子どももいる。仲のいい友達はいても、学級全体としてのつながりがまだ十分でなかった。そこで、これまでにみんなで協力して楽しく活動する「カム・オン」や「ミラクルマット」、お互いのことを聞き合う「すごろくトーキング」等でふれあいを通じ、集団に対する不安をなくし、子ども同士の結びつきを強めるためのエクササイズを行ってきた。さらに、「ほめあげ大会」を実施し互いのよさを見つけ、認め合うことによって、一人一人の自己のよさに気づかせるようにした。どの子どもも友達のよいところを見つけ、自分のことを

褒めてもらう体験ができ、自分を見直すきっかけになった。

4 指導観

本題材「がんばり賞をおくろう」は、前時に行った「ほめあげ大会」と同じく、互いのよさを認め合う活動を通して自己肯定感を高めるエクササイズである。前時で芽生えた自己肯定の気持ちを強化したいと考え、ねらいを同じくするエクササイズを続けて選択した。

「ほめあげ大会」では、主にその子の特徴的なことや性格を褒めていたので、前回と似た賞にならないようにしたいと考えた。また、考えることに時間を取ったこともあり、今回は児童の日記なども資料として提示し、行事や出来事がすぐ思い出せるようにした。それらの具体的な出来事を通して、その時の友だちのよい行動に焦点が当たるようにした。そして、表彰状にも具体的理由を書く枠を設けた。さらに、支援を必要とする子には、「ほめあげ大会」で子どもたちが書いた「よいとこカード」を見せ、友達のよいところに気づかせ、よさのわけを具体的に表現させるようにする。最後に、自分がもらってうれしい賞を友達にあげることで、できるだけ他の人が思いつかない賞などがよいことなどを話し、温かく和やかな雰囲気の中で活動ができるよう支援する。また、グループ編成についても、友達関係に不安のある子を中心に編成し、その子が表現しやすいように、その子と仲のよい子を入れる等の配慮をする。

5 本時の目標

互いのよいところ、すばらしいところを見つけて認め合うことにより、自己肯定感を高める。

6 授業仮説

友だちから、自分のことを褒めてもらう経験をし、自分のよさに気づけば自己肯定感が高まるであろう。

7 本時の展開

段階	学習活動	指導上の留意点	評価の視点	資料等
導入 3分	1 今日の学習のめあてを知る。 友だちや自分のよいところを見つけて認め合おう	本時の活動内容を知らせ、目的意識を持たせる。 前時の学習と結びつけ意欲づけをする。		めあての掲示 前時のカードを掲示
展開 27分	2 エクササイズ「がんばり賞をおくろう」の方法を知る。 3 「がんばり賞」を書く。	「がんばり賞をおくろう」の説明をする。 1人4枚の賞状を書くことを確認する。 できるだけ賞が重ならないことを意識させる。 相手のがんばったことが見つけられない児童にはこれまでの出来事を思い出させる。 友だちのよいところを見つける体験をする 表彰されてうれしくなるような内容を書くようにさせる。 友だちのがんばったところを見つけようとしている。(関心・意欲・態度)		がんばり賞の見本の掲示 これまでの出来事の掲示 賞状の用紙 テープ(表彰)

	4	表彰式をする。 表彰の仕方を知る。 一人一人表彰される。 賞状を受け取りお礼を言う。	友だちに認められる体験をする 全員が表彰されるようにする。 グループごとに協力して表彰式をしようとしている。(関心・意欲・態度)	式のBGM)
終	5	シェアリングをする。 全体の場合	今日のエクササイズをして考えたこと感じたことを発表させる。	
末	6	まとめ まとめの話を聞く。 ふりかえりカード に感想を書く。	今日の学習を通して思ったこと、考えたことをまとめ、ねらいに迫ることができる。(思考・判断)	ふりかえりカード
15				
分				

結果と考察

仮説の検証

一人一人の児童や学級の実態をつかみ、課題にあった構成的グループエンカウンターを体験させれば、友だちのよさに目を向け、自分のよさにも気づき、互いに認め高め合う学級集団が育成できるであろう。

仮説の検証を行うために5回の構成的グループエンカウンターを実施した。また、ふりかえりカードと実施後の変容の状況を把握するために行ったQ-Uの結果から、分析と考察を行う。

1 ふりかえりカードの分析と考察

エクササイズやシェアリングを終えた後に、図6のような「ふりかえりカード」を書かせた。ふりかえりカードは、エクササイズが楽しくできたかという問いと、友だちとの関わりがつかめる内容の問いを1~2問用意した。最後に今日のエクササイズを終えて、思ったこと考えたことを書く欄を設けた。これによって、楽しくエクササイズに参加することができたか、友達との関わりはうまくいっているのか、児童がエクササイズでの経験をどう捉えたかを確かめることができる。

図6 ふりかえりカード

「今日の勉強は楽しかったですか。」の問いには、「カム・オン」「すごろくトーキング」「ミラクルマット」「ほめあげ大会」「がんばり賞をあげよう」等、5回の活動すべてにおいて90%以上の子が「楽しかった」と答えた。また、授業終了後にも、今度はいつどんなことをするか聞く子が多かった。どの子にとっても楽しく活動できたことがわかった。

また「協力してできましたか。」の問いには、どのエクササイズにおいても90%以上の子が協力してできたと答えている。

「すごろくトーキング」「ほめあげ大会」においての友達への気づきに対する問いには、96%以上の子が友だちの新しい面に気づきがあったと答えた。

各回ともいろいろなグループ編成でエクササイズを展開していったがどの子と一緒になくても協力してできたことから、リレーション作りがうまくいったと考えられる。また、友達と気持ちの交流をすることを通して友達への理解も深まったと考えられる。

さらに、一つ一つのエクササイズの感想を見ていくと次のようになる。

第1回の「カム・オン」の感想として「みんなと遊べばとっても楽しいと思った。」「みんなと協力しないとできないゲームだと思った。新しいクラスもおもしろそうなクラスになりそうだった。」等の感想が多かった。仲間と遊ぶことのよさや協力し合うことの大切さを感じ取っていることが読み取れる。また、学級の友達をいい仲間と意識し、新しいクラスの仲間に対して期待を持っていることも読み取れる。

第2回の「すごろくトーキング」では、「グループの人のことがよくわかった。わたしもちゃんと言えてよかった。とても楽しかった。」「友だちのことや自分のことを伝え合うのってとってもおもしろいということがわかった。」等の感想が多数あった。自分のことを話したり、友だちの話を聞いたりする体験を通して、受け入れてもらえることの気持ちよさと友達の新たな一面を知ることができたことの喜びがわかり、相互理解が広がったと考える。

第3回の「ミラクルマット」では、「おぶったり、連れてってたりしてくれた。うれしくて友だちだなーと思った。」「わたしが目が見えない役するとき、さんが運んでくれた。友だちは大切だなと思った。」等の感想があった。友だちを助けたり助けられたりする経験を通して、子どもたちの中に信頼関係が芽生えたことが読み取れる。

第4回の「ほめあげ大会」では、「みんなわたしが考えているよりもいいところを書いてくれてとてもうれしかったし、わたしのことをよく知っていて、とてもかんげきした。わたしもみんなのいいところを考えたい。」「友だちにもぼくにも、いいところはいっぱいあるんだと思った。」等の感想が多かった。このことから友だちが予想以上に自分のことを理解してくれていて自分もそれに応えようと努力した様子が読み取れる。エクササイズを通して相互理解が深まったのが理解できる。

第5回の「がんばり賞をおくろう」では、「わたしは、こんなにすごかったんだなーと思った。だから、しょうじょうをもらったときとてもうれしかった。」「がんばり賞をもらって、本当にみんなぼくのことをすごく思ってくれていてうれしかった。また、がんばり賞をあげて、うれしそうにわらってくれたのでぼくもうれしくなった。」等の感想があり、表彰されることにより、自分はすごいと素直に喜ぶ様子から、自己肯定感の高まりが読み取れる。

リレーション中心のエクササイズから内面に迫るエクササイズへと5つの活動を展開していったが、子どもたちは他者理解、自己理解を深め信頼関係を築きつつあると考える。

2 Q - Uの結果

学級や児童の変容を客観的に把握するため、5回の構成的グループエンカウンター終了後、再度Q - Uを実施した結果、以下のような変化が見られた。

(1) 学校生活意欲プロフィール (図7)

友達関係・学習意欲・学級の雰囲気 の3つの領域とも値が高くなっている。特に5月の時点で低かった友達関係が 9,24 上がり一番向上している。「クラスの人から好かれ仲間だと思われている」という質問に否定的に答えた児童も 11人から 6人に減った。

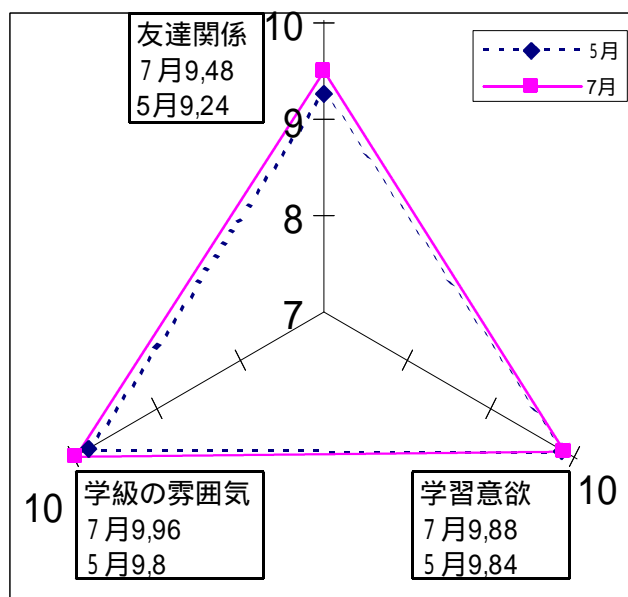


図7 学校生活意欲プロフィール

(2) 学級満足度尺度 (図8)

全体的に承認得点が上がったことが認められる(5月 16.48 7月 17.44)。それに伴い、非承認群児童数も 8人から 5人に減少した。児童個別にみると、承認得の低かったAさん・Bさん・Cさんは、承認得点が高くなった。

被害得点は、全体的に高くなっている(5月 11.16 7月 12.92)。それに伴い、侵害行為認知群に属する児童は、2人から4人に増加した。

学級生活不満足群に属していた児童も、承認得点はよくなった。しかし、5月に学級生活不満足群にいた児童のほとんどが、まだ学級生活不満足群に属している。

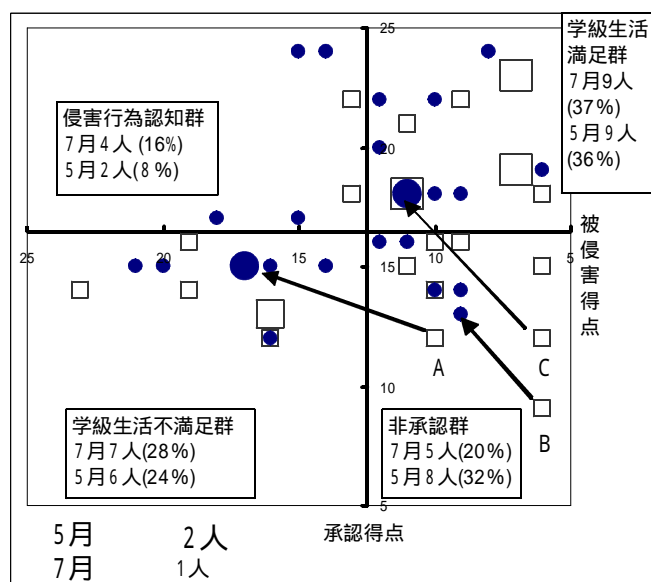


図8 学級満足度尺度結果

3 Q - Uの考察

(1) 学校生活意欲プロフィール

学校生活意欲プロフィールの友達関係の点が高くなったのは、構成的グループエンカウンターを通して、相手のことをよく知ることができたり、助け合ったりする中で、交流が深まり互いにいい感情をもち、児童間に好ましい人間関係が広がってきていると考える。

(2) 学級満足度尺度

非承認群に属していた児童は、「ほめあげ大会」や「がんばり賞をおくろう」などの構成的グループエンカウンターを通し、学級の友だちに自分の良いところを見つけてもらい認めてもらう体験を通して、自分のよさや友だちから見た自分の姿を自覚し、自己肯定感を高めることができたのではないかと考える。その結果、非承認群に属していた児童が減り、学級全体の承認得点の上昇となって現れたと考えられる。しかし、まだ友人関係に不

安を持つ児童がいるので、これからも好ましい人間関係を築くショートエクササイズなどを実施していく必要がある。

被侵害行為認知群の児童増加については、様々な構成的グループエンカウンターを通し、自己開示が進み自己主張できる子が増えてきたことが要因と考えられる。交流を深める「カム・オン」、受容体験を促す「すごろくトーキング」、相互理解を促す「ミラクルマット」等を体験したことによってリレーションがとれ、これまでより自分の考えを出せる児童が増えた。そのことにより、活動する中でそれぞれの意見の相違によるトラブルが多くなったことが、侵害行為認知群の増加となって現れたと考える。これからの学級での取り組みとして、朝の会や帰りの会などを活用しながら、他の人の気持ちを思いやることをねらいとした構成的グループエンカウンターを取り入れ、相手の立場になって考え行動することができるよう指導していく必要がある。

学級不満足群に属する児童については、承認得点が高くなったにもかかわらずその多くがまだ学級不満足群にいる。今後も、これらの児童が学級内で楽しく活動できるよう、きめ細かい支援をしていく必要がある。具体的には、個別に声をかける回数を増やし心情を把握するように努めたり、活動する際のグループ作りで児童が参加しやすいような配慮をしたり、学校・家庭との連携を図りながら、具体的、個別的、継続的な指導をする必要があると考える。

研究の成果と課題

1 成果

- (1) Q - Uを活用し、学級の実態および一人一人の児童の実態について客観的理解ができた。
- (2) 構成的グループエンカウンターを取り入れた学級活動の年間指導計画案(4年)を作成することができた。
- (3) 学級の課題に合わせた構成的グループエンカウンターを実施した結果、児童間の信頼関係が深まり、互いのよさを認め高め合う学級集団の育成が図れつつある。

2 課題

- (1) 支援の必要な児童を中心に、他の人の気持ちを考えるエクササイズを実施し、自己理解や他者理解を促し、学級集団の質的向上を図る。
- (2) 児童の内面の成長をとらえるシェアリングの方法について継続して研究する。

《主な参考文献》

文部省	「小学校学習指導要領解説 特別活動編」	東洋館出版社	1999
國分康孝監修	「エンカウンターで学級が変わる小学校編」	図書文化社	1998
宮川八岐編・著	「特別活動の授業」No. 1	小学館	2001